

学校目標 生き生き久間っ子の育成

くふうしてまなぶ つよくてたくましい こころ やさしい 子

12月8日（火曜）全校 被爆者の話を聞く会

今年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、6年生の修学旅行での被爆講話ができませんでしたので、鹿島市の被爆者の会にお願いをして、被爆者の話を聞く会を開催しました。4名の方に話をさせていただきました。戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろしさを、その中で生き抜いた方から伝え聞く貴重な時間となりました。同時に、「原爆と人間」というパネルも展示しました。写真や絵からも、戦争や原爆の悲惨さについて感じることができました。



家の床下に防空壕があったこと 1日中防空壕の中の時もあったこと
水をください 小便でもいいから水をください と言われたこと
運動場や空き地で、毎日遺体が焼かれていたこと
全身包帯を巻かれた人が、たくさん道を歩いていたこと
自分の家族を亡くしたこと

本当につらい記憶を、世界の平和への思いをこめて 語っていただきました。



当時の格好を説明もしていただきました



お礼の言葉を伝える6年生

戦争の悲惨さ、後世へつなぐ

鹿島市被爆者の会が講話

鹿島市
鹿島市

鹿島市塩田町の久間小（坂本和子校長、190人）で8日、被爆体験の講話が開かれた。「鹿島市被爆者の会」のメンバー4人が、長崎で被爆した体験や戦争の恐ろしさを全校児童に伝え、二度と戦争を繰り返さないよう呼び掛けた。

例年、6年生が修学旅行話を聞いているが、今年行先の長崎で被爆者の講話は新型コロナウイルスの



児童に防空頭巾を被ってもらい、当時の格好を説明する「鹿島市被爆者の会」のメンバー。鹿島市塩田町の久間小

久間小児童 修学旅行の代替で

影響で実施できなかった。被爆者の生の声を聞く機会を設けようと、同校が同会に依頼して初めて開いた。

5歳の時に長崎で被爆した樋口敏夫さん（80）は、父親に背負われて避難した。途中、水を求める人が父親の足を引っ張り「小便でもいいから飲ませてくれと頼む人もいた」と悲惨な状況を伝え「戦争はとても怖いもの。二度とあってはならない」と強調した。

同様に長崎に住んでいた中尾敬子さん（82）は「空襲警報が鳴ると、防空頭巾を被って防空壕に逃げた。中は小さくて暑く、1〜2時間いる時もあった」と話した。

会場の体育館には原爆のパネルが展示された。6年生の楠田ひめ乃さんは「被爆して血を流す人の資料や親を亡くした悲しい話が印象に残った」と語った。（松田美紀）

令和2年12月9日（水曜日）付の佐賀新聞